

No.2805

植民地期朝鮮における衣服の社会史的研究

—民衆の衣生活における実践とその変化の分析を通じて—

東京大学大学院 人文社会科学研究所

事務補佐員

平野 鶴子

本活動の目的は、植民地期朝鮮(1910～1945年)における朝鮮民衆の衣生活をめぐる実践とそれを規定した諸要因について実証的に明らかにすることである。とりわけ、本活動では、戦時体制下の都市部における衣料品の消費統制に関連する研究を重点的に実施し、あわせて、衣生活の実践に関する口述調査も実施した。

調査の結果、次のような知見を得た。第一に、戦時下の綿布の消費統制にあらわれる朝鮮の特殊性についてである。綿布消費統制の日朝間における最大の相違は、日本本国では早期に内需向け綿製品の供給制限がなされたのに対し、朝鮮においては植民地期を通じて綿スフ混用規則が維持され、手紡綿布を含む綿布が供給され続けた点である。これは、朝鮮の需給状況の実態の反映であると同時に、原棉節約と供出の活性化を目的としたものであった。つまり、朝鮮が原棉の供給地であるという事実もまた、朝鮮の綿布統制における大きな特徴だったのである。一方、朝鮮民衆のあいだでスフ混用綿布に対する忌避行動や純綿布の闇取引も見られた。これは、スフの性質が、朝鮮の衣生活、つまり朝鮮式洗濯方法に適していなかったことが最大の要因であり、スフ製品の使用強制に甘んじるよりも、それまで維持してきた衣生活の特質を守るために手紡綿布を求めた人々が存在したことの現れでもあった。

第二に、衣生活の近代化における特徴についてである。口述調査の結果、1930～40年代における衣生活は、韓服、改良服、洋服、もんぺ、国民服などを状況に応じて着分ける多重構造が見られた。旧来の伝統的な衣服ではなく新式の衣服を着用するということは、'衣生活の近代化'として理解できるが、居住地の移動を主な原因として、新式から旧来式に遡る形で変化することがあった。つまり、'衣生活の近代化'は、必ずしも旧式から新式へというように一方向的には起こりえず、定着にも時間を要したことが分かった。衣生活をめぐる経験と実践の変化の過程において、多様で決して単線的ではない朝鮮の近代化の実像を見出すことができる。